



Title : 年末年始はまとめ読み

❁ありがとうアントラーズ

キックオフ前に勝つかもしいないと思ってました？何の話かって？12月14日のFIFAクラブワールドカップ準決勝、鹿島アントラーズ対アトレティコ・ナシオナル（コロンビア）の一戦のことですけれどね。

私は、1対0の前半終了時点はもちろん、後半38分に相手の運動量が落ちて2点目が入った時でさえまだ分からないと思っていました。それにしても南米王者を相手に3対0の完封劇とは。

そして決勝のリアル・マドリード戦。今度こそ一方的な試合になるだろうという大方の予想を裏切り、90分が終わって2対2のタイだなんて、まるで夢を見てるよう。

Jリーグ発足時に本田泰人の疲れを知らない献身的なプレーに感動して以来のサポーターとして、あんな怪物ばかりのチーム相手にここまでやってくれたら何も言うことはない。今年のJリーグチャンピオンシップからクラブW杯決勝までの鹿島アントラーズの戦いぶりは、まさしくジーコスピリットを体現したもの！ありがとうアントラーズ。

私情だけでここまで書いてしまいました。ついでに(?)図書館にかこつけて書いておくと、中央図書館ではスポーツ雑誌として隔週発行の『スポーツグラフィックナンバー』（文藝春秋）を毎号購入しています。特集が楽しみです。ねっ。

❁大館が舞台の.....

前回も書きましたが、大館市立図書館の年末年始休館は12月29日（木）から1月3日（火）までの6日間です。その前、12月28日（水）まで貸出冊数の上限を倍増しています。図書・雑誌が10冊まで、紙芝居も10巻まで借りられます。貸出期間も普段より1週間長い3週間です。どうぞたくさん、と言っても読める範囲で借り出してください。

まとめ読みできる時に何を読むか。べつに読みたいものを勝手に読めばいいんですけどね。でもせっかくだから、小説で何をテーマにして読もうかと考えてみると.....、たとえば大館を舞台にした作品をまとめて読む、というのが浮かびました。

近年のものでは、吉田修一著『平成猿蟹合戦図』（朝日新聞出版、2011年、中央・比内図書館所蔵）がありますね。主人公の若者が大館出身で最後は地元で衆院選に立候補します。ミステリであり、群像劇であり、権威に対する戯画化でありといった内容です。

わりと最近のものでは、荻原浩の『二千七百の夏と冬』（双葉社、2014、中央・比内・田代に所蔵）。舞台は2700年前の日本、縄文時代の終わり頃2011年、ダム建設地を掘削中に若い縄文人男性と弥生人女性の人骨が手をつないだ形で発見されたところから、現代パートと縄文パートが平行して描かれていきます。縄文人男性の名前はウルク。住んでいるムラはピナイ、といったら古くからの大館地方一帯の呼称である比内のアイヌ語地名ではありませんか。

と書いておきながらナンですが、結局ピナイは北関東であることが明らかになります。

しかし私はあくまで大館／比内地方として読み進めました。
フジの山と見たのは鳥海山だし。ムリヤリですが大館ものに認定です。縄文歴史小説というほかに例を見ない作品が、マタギの本場を舞台とせずにするの。

ちなみに、縄文人は全員が酒に強いALDH型の遺伝子を持っていたとのこと。そういえば酒の強い人って縄文的な形質の人が多いかも。

本作は2014年の第5回山田風太郎賞（一般財団法人角川文化振興財団）の受賞作。ジャンルを問わず、対象期間に発表された中で最も面白い作品に贈られる賞なので、外れなし。今年の第7回までの山風賞全8作を年末年始に読むというのも、いいかも知れないですね。中央図書館では小説に限らず各種の受賞作品をカウンター前に並べています。どうぞ参考にして下さい。

大館モノに戻ると、十二所生まれで鳳鳴高校や桂高校などの国語の先生も長く勤めた小説家、佐藤鉄章の初期の作品がいくつかあります。映画化（久我美子・高倉健出演）もされた『季節風の彼方に』を始め、『湖』、「いくたびの門」（『エリカの夏』所収）など昭和30年代前半に発行された作品群です。ただ残念ながら現在は販売ルートに乗っているものは皆無です。市立図書館では所蔵していますが、後年の歴史物を除き貸出しはできません。それでも館内での閲覧はできますので、興味のある方はカウンターに申し込んでください。

当コラムもこれが今年最後。皆様にメリー・クリスマス、そしてどうぞよいお年を。
（陽）